

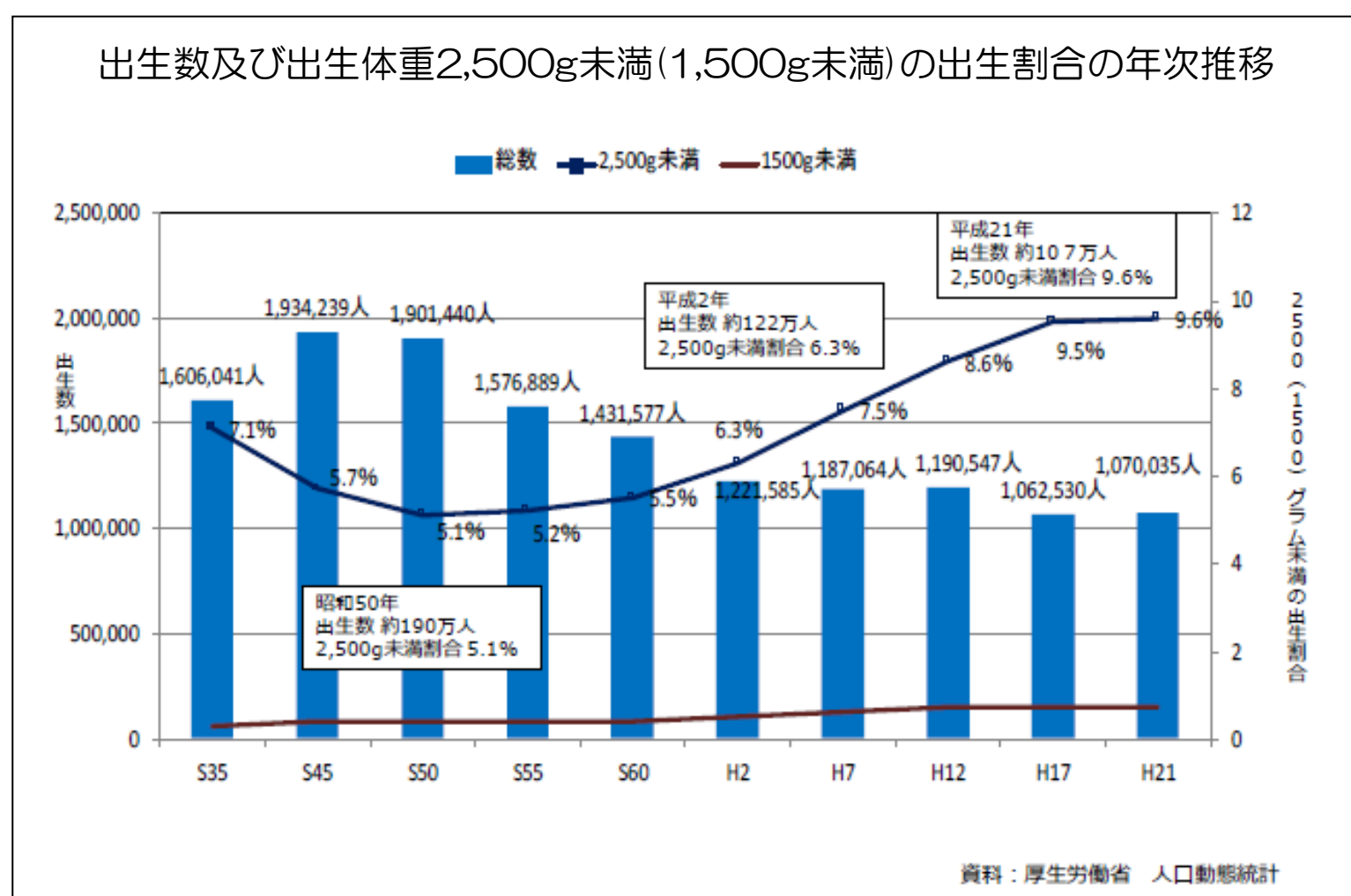
新生児内科

身近に実感 ～新生児医療～

みなさん、こんにちは。いきなりですが質問です。みなさんの周りで「未熟児で産まれた」という言葉を耳にしたことはあるでしょうか？おそらく周りの何人かに聞けば答えが返ってくるくらい、そんなにめずらしくない言葉でしょう。

未熟児とは、生きていくために十分な機能が備わってない状態で産まれてきた赤ちゃんを指す言葉として一般的に使われています。（医学的には、未熟児では定義があいまいとなるため、出生時の体重が2,500gを切ると「低出生体重児」、おなかの中での期間が37週に満たないと「早産児」として区別して呼びます。）

それでは、未熟児のなかでもみなさんがイメージするような体重の小さい子はどのくらいの割合で産まれているのでしょうか？



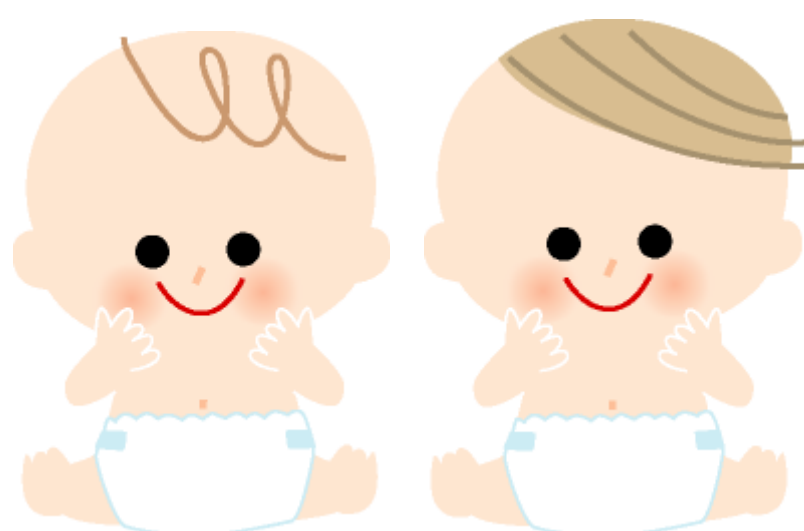
厚生労働省の統計では、上の図のように、ここ30年で出生数は減っているものの、2,500g未満で産まれる赤ちゃんの割合がほぼ10人に一人に増えていることがわかります。その背景としては、大きく2つの側面があります。

1つは早産の増加・胎内での発育不良のため、昔と異なり体重の比較的大きな低出生体重児が増加してきていることです。現代の女性の「やせ」志向が、赤ちゃんの体重にも影響してきているようです。

そして、2つめとして、周産期医療の進歩により、かなり未熟な新生児でも救命できるようになってきていることが挙げられます。ここ30年で新生児医療は劇的な進歩を遂げています。そして、現在では治療の目標が「救命」ではなく、「後遺症のない生存」へとより高いものへと変わってきています。

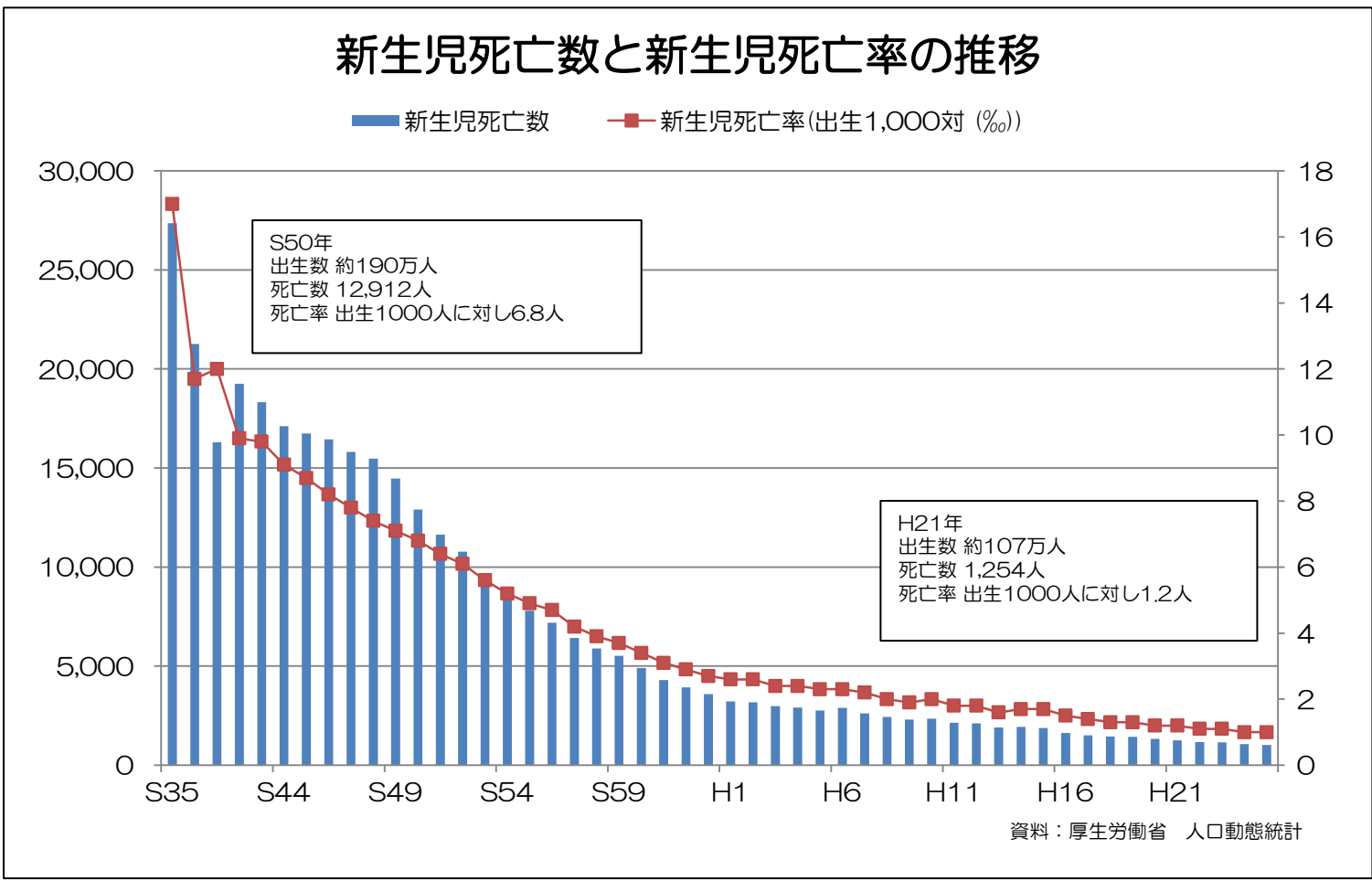
それでは、未熟に産まれた赤ちゃんはお母さんのおなかを出てからどのように育ち、元気に家族のもとへ退院していくのでしょうか？

このブースでは、そんな普段はなかなか覗くことのできない新生児医療を、ミニNICU(新生児集中治療室)を通じて体感していただければと思っています。また、普段スタッフがどんな想いで赤ちゃんに関わっているのかも知ってもらう機会になればうれしく思います。

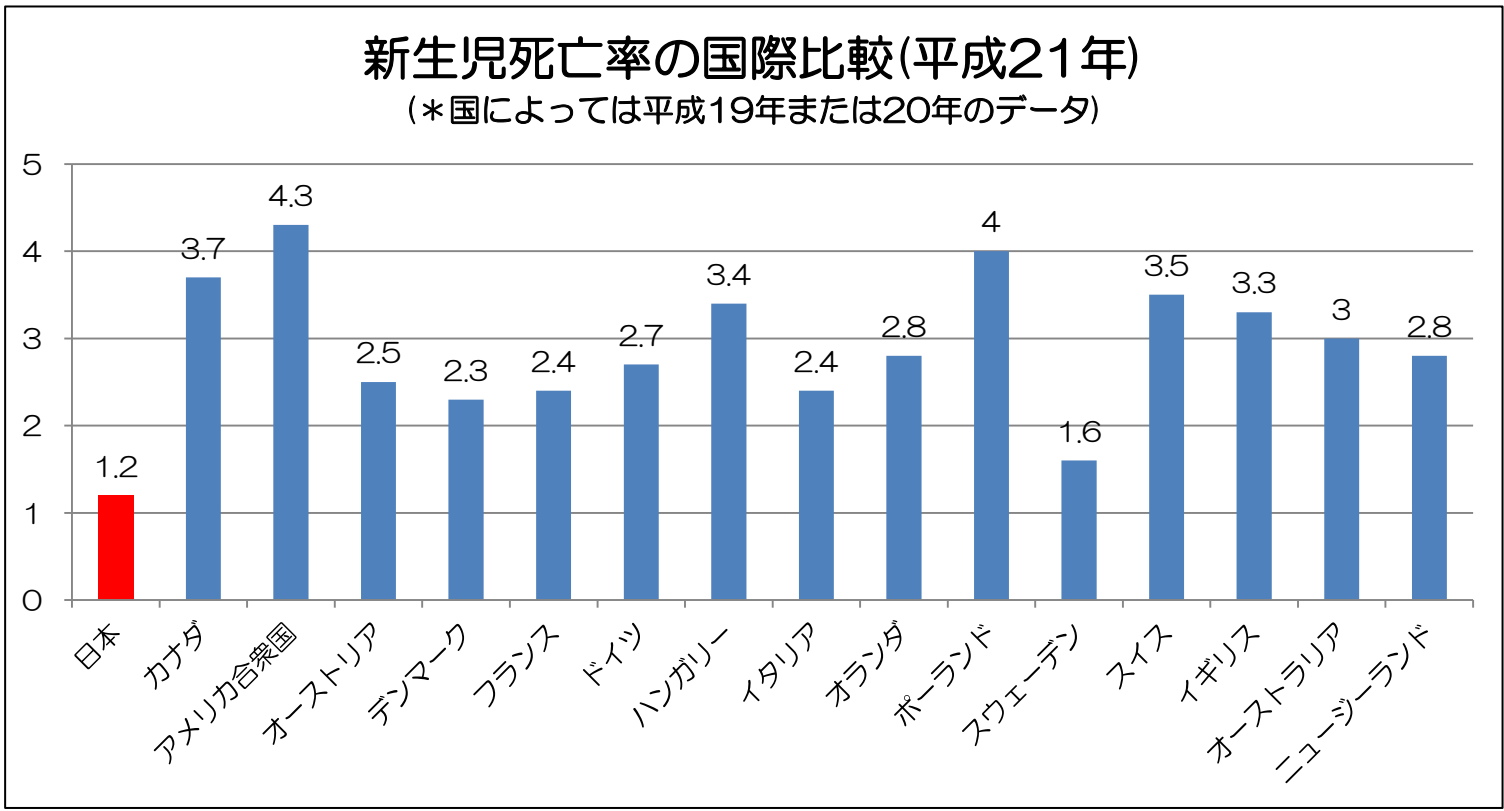


世界一の新生児医療先進国 “日本”

前のポスターで、“ここ30年で新生児医療は劇的な進歩を遂げている”と書きましたが、それを裏付けるデータをお示しします。



昭和50年では新生児1,000人が産まれても、6.8人は助からないという状態でしたが、現在ではそれがほぼ1人に近い状態まで減らせています。これは、下の図のように、世界の他の国と比較してもかなり低く、**世界一**の水準なのです。



ここ30年の間に、日本において、「肺サーファクタント」という早産児の呼吸障害に対する特効薬が開発され、それまでは呼吸が保てずに助からなかった赤ちゃんを助けることができるようになりました。また本日展示してある、HFO(高頻度人工換気)といって、振動によって肺での酸素と二酸化炭素の交換を進める人工呼吸の方法も日本で進歩を続けてきました。

もしかすると、NICU(新生児集中治療室)というと、重症な赤ちゃんがいてすぐ死んでしまう場所で怖いというような誤ったイメージを持っていらっしゃる方もいるかもしれません。しかし実際はそうではなくて、生まれてきた赤ちゃんが後遺症なく未来に羽ばたいていけるように、世界に誇る医療レベルでサポートをする場所なのです。



赤ちゃん・家族に優しい NICUを目指して

それでも、われわれ未熟な赤ちゃんに関わる医療スタッフとしては、新生児死亡率をできるかぎりゼロに近づけたい、後遺症なく元気に家族のもとへ巣立って行ってもらいたいという想いをもち続けています。赤ちゃん・家族に優しいNICUを目指して、当院でどのようなことに気を付けながら医療を行っているのか、一例を紹介をさせていただきます。

①光の調節

もともと暗い子宮の中にいた未熟児にとって、室内で過剰な光を浴び続けることは、睡眠のパターンが乱れ、発育や発達に悪影響であると考えられています。そのようなことに配慮し、間接照明を活用したり、日中と夜間で光の照度に差をつけたりしています。



②ポジショニング

子宮の中で羊水に浮かんでいる状態では自然な姿勢をとることができますが、出生後は重力の影響がでてきます。赤ちゃんは最も楽な姿勢をとることで、呼吸などの状態を落ち着かせることができるため、人工的にこのように楽な体勢をとってもらえる「ポジショニング」のケアを積極的に行っています。

③カンガルーケア

カンガルーケアとは、赤ちゃんをお母さんの胸の中で抱いてもらい、直接体温をやり取りすることです。お母さんとの愛情がより強くなるだけでなく、赤ちゃんが落ち着くことができ、呼吸などの状態改善につながる効果も期待できます。赤ちゃんの状態を見ながら、無理のないように行っています。



④感染予防

未熟児は細菌やウイルスなどの外敵に弱く、感染症については常に細心の注意を要します。NICUでは入院中の赤ちゃんごとにケアのためのプラスチック手袋が用意しており、またスタッフ全員が個人用アルコール消毒液を持ち歩き、1つ1つの処置・ケアの前後でこまめに手の消毒を行っています。

⑤母乳育児の推進

母乳は人工ミルクと比較し、脳の成長に必要な栄養が豊富、細菌やウイルスの侵入を防ぐ物質が多く感染症の発症を減らします。またお母さんと赤ちゃんの愛情をより深めることにもつながり、大人になってから生活習慣病などの病気の発症が減ることもわかってきています。NICUでは産科とも協力し、母乳での育児を推進しています。

